戦後アジアにおけるコレクション形成
―福岡アジア美術館の活動を手がかりに

岸　清香

都留文科大学

1990 年代以降のアジア地域において、「アジア美術」と呼ばれる収集領域が現れ、コレクション活動が進展している。「現代」「近代」「アジア太平洋」「東南アジア」などその対象範囲を異にしつつも、域内外の美術界が接続された相互に重なり合う複合的なネットワークのなかで、市場関係者、収集家や美術館組織が「作品」を集め、価値づけ、分類・体系化をはかっている。

なかでも福岡アジア美術館のコレクションは、「アジア 21 ヶ国・地域の多様なジャンルの作品を網羅」しつつ、「既製の『美術』の枠をこえていく」アジアの「近現代美術」を収集する活動として知られる。それはまた、福岡市美術館において 1977 年の設立以来収集されてきた「アジア・コレクション」を基に、1995 年、新たに福岡アジア美術館の収集方針としてまとめられた価値体系でもあった。既存のコレクションとの差別化を目指すいわば同館独自の美術観の表明であったといえる。

本報告では、この福岡アジア美術館コレクションの形成過程をたどり、同館の収集活動に関連するアジア域内外のネットワークの様態とともに、そこで形づくられた「アジア近現代美術」という価値体系＝美術観の実体を明らかにすることを目的とする。同コレクションでは、東アジア・東南アジア・南アジアという3地域を対象に、地域毎に異なる多様なネットワークと関係性において収集された作品が、「現代」「近代」「生活造形」という相互に乗り入れる3つのジャンルへと分類・体系化されている。と同時に、その収集プロセスにおいては、「日本」と「アジア」の「和解」を踏まえ、「西洋近代」に対抗しつつ自らの社会の「現実」に向き合う「アジア近現代美術」という美術観を打ち出すことが可能になったと考えられる。

こうした事態は、各国近代美術史の構築を第一に目指した戦後アジアのコレクション活動が、冷戦構造の崩壊に伴うアジアの地政学的変化において新たな可能性を見出したことを示すものであろう。「アジア美術」というコレクション活動を成立させている社会的力学について考察する手がかりとしたい。